



(損保版)

第1~4月曜日発行
発行所 新日本保険新聞社
大阪府西区本町1丁目5-15
(郵便番号550-0004)
電話 (06) 6225-0550 (代表)
FAX (06) 6225-0551 (専用)
購読料 1か月2200円
(消費税、送料込み)
©新日本保険新聞社 2022

Shinnihon Web
www.shinnihon-ins.co.jp
購読者専用バックナンバー
閲覧パスワード
Aurora
2022年4月4日 AMまで
※偶数月の第一日曜日正午ごとに変更

線虫がん検査「N-NOSE」

日本代協 阪神ブロック協議会 公開講座開催

(株)HIROTSUバイオサイエンス・広津社長が講演



山中ブロック長

山中ブロック長が「がんは早期発見で治ると言われている病気です。本日、N-NOSEについて知っていただき、皆さまご自身、また大切な方をお守りできればと思います」と挨拶した。

がんは、1981年から日本人の死因第1位で、今や2人に1人が経験し、3人に1人が死亡している。まず、広津氏は、がんの解決は早期発見、早期治療が重要であるにもかかわらず、日本人のがん検診受診率は3~4割程度で先進国の中で極めて低いと指摘。

早期発見・早期治療が重要
ステージ0-1で87%検知

日本代協阪神ブロック協議会(山中尚ブロック長)は、2月19日午後3時から、公開講座「線虫がん検査「N-NOSE」を知る」を行った。一滴の尿から全身のがんリスクを高精度に判定することができた。日々進化する「がん」の一次スクリーニング検査を開催した。講師の株式会社HIROTSUバイオサイエンス・代表取締役の広津崇亮氏が、N-NOSE実用化に向けての取り組みやその機能性などについて語った。



広津氏

その理由として、①面倒(検査を受ける時間、医療機関に行くこと)、がん種ごとに異なる検査を受ける必要がある、②がんと診断されるのが怖い、③診断まで時間がかかる、④費用が高い(1度に全身のがんを調べることができないPET-CTは一回12万円)、⑤痛みを伴う、⑥精度が高くない(腫瘍マーカーは1回数千円だが、早期がんの発見精度は10%程度)といったことを挙げた。

「がんの種類の特長」(第2スクリーニング)、画像・組織診(精密検査)と3つの区分がある。がんの早期発見という観点からは第1次スクリーニングでの検査は欠かせない。しかし、第1次スクリーニングの検査として便潜血検査、レントゲン検査、エコー、内視鏡検査といったものがあるものの、手軽で低コスト、痛みがなく、しかも高精度な網羅的ながんスクリーニング法は存在しない。

1滴の尿から15種のがんを高精度に検知

そこで同氏は、臨床現場で言われていた「がん患者には匂いがある」ということに注目し、機械を上回る高精度の嗅覚を持ち、しかも世界で広く飼育、研究されているポピュラーな生き物である線虫に着目し、2013年5月から線虫(C. elegans)ががん特有の匂いを嗅ぎ分けられるかについての研究を開始した。簡便に採取できる尿を使って検査(N-NOSE)をしたところ、ステージ0-1の段階で約87%の感度でがんを検知できることが分かった。CEAやCA19-9といった腫瘍マーカーによる検査方法ではわずかに約14%である。また、ステージ3-4においても、他の検査が約40~53%であるのに対し、N-NOSEは約9割と高い数値を示した。

自宅からの検診も可能
生損保会社との連携も

2020年1月に簡便・高精度・安価で早期がんを発見する検査として実用化されたN-NOSEは、1度の検査で①胃がん、②大腸がん、③肺がん、④乳がん、⑤子宮がん、⑥すい臓がん、⑦肝臓がん、⑧前立腺がん、⑨食道がん、⑩卵巣がん、⑪胆管がん、⑫胆のうがん、⑬膀胱がん、⑭腎臓がん、⑮口腔・咽頭がんの15種を検知することができる。とくにすい臓がんに関しては早期の段階で検知できるだけでも革命的と言われる中、すい臓がんとそれ以外のがん種(5大がんを含む10種)の識別においても95.5%と驚異的な感度を示す。すい臓がん特定検査は2022年中の実用化が予定されている。

原因で、昨年4~5月の検診受診率は前年比92%減となった。そこで、ネット予約により送付されてきたキットに自宅で尿採取し、それをN-NOSEステーションに持ち参ることで検査を受けられる(GoToN-NOSE)方法を立ち上げた。その後、さらに個人宅に検体を取りに行くサービス「N-NOSE at home」をほぼ全国レベルで開始した。

保険業界では、すでにN-NOSEをがん保険に付帯させたり、顧客に検診を推奨したりしている生保会社や、N-NOSE高リスク者の二次検査を補償するなどアフターフォローの充実の一環として取り入れようとしている損保会社もある。N-NOSEが普及すると、一人ひとりのがんの現状を把握することが可能になり、がん保険の商品設計にも大きく影響して参ることが考えられる。

結びとして同氏は、「最近、一般の方だけでなく、保険代理店ご自身あるいはお客様がN-NOSEによってがんを早期発見することができ助かりました」とお便りをいただきました。これからも引き続き関心を持っていただき、ご自身、お客様に勧めたいだけじゃなく、れしく思えます」と締めくくった。

N-NOSEは、がんの有無(第1スクリーニング)だけでなく、がん種の特長(第2スクリーニング)ができる機能も兼ね備えている。実際の検査は、自動解析装置フルオート機によって行われる。人手に頼っていた頃の1日あたり検体数は検査員1人あたり約5検体程度(8時間)だったのが、今は装置1台で約250検体(16時間)と飛躍的に拡大している。機械化により、検査精度の向上と安定化、解析キヤパシティの拡大が容易に行き届くようになったこと

なった。現在は、保険会社や企業、健保組合、医療機関、自治体などで導入され、検査は全国にある「N-NOSEステーション」(5か所)、「N-NOSEステーション・サテライト」(12か所)で行われている。2020年11月からすでに約15万人が受診した。しかし、新型コロナウイルスによる外出規制で医療機関に行きにくくなったこと

保険業界では、以前は「もしもの時の保険」と考えられていたが、現在は「健康をトータルサポートするもの」に変ってきている。これは医学界でも同じで、「もしもの時の治療」から「予防や検査により病気を早期発見する方がより多くの命を守ることができるようになってきている。そういった意味で両業界の変化と同社の位置づけは親しいものとして、数社の保険会社と連携している。

セミナー最後に兵庫県代協の塩谷広志会長が「医療は日進月歩で進んでいますが、やはり早期発見・早期治療が決め手になります。今、画期的な検査法であるN-NOSEが非常に注目されています。この機会にぜひ検診いただきたい」と挨拶し、終了となった。